

認知症ケア向上のための多視点観察情報に基づく状況理解と共学に関する研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2017-12-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柴田, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024348">https://doi.org/10.14945/00024348</a>

本論文は、認知症の人の生活全体を支えることを目的とした認知症ケア向上に向けて、認知症の人の状況理解を促進するために開発した多視点観察情報に基づく認知症評価システムと、その活用によりケアに携わる複数の関係者が認知症について共に学び理解を深めることを支援するための共学環境について述べたものである。

第1章は序論であり、本論文の位置づけについて研究の背景・目的と論文構成について述べている。

第2章では、認知症ケアの現状と向上に向けた取り組みについて述べている。認知症の原因疾患、症状、状態像と鑑別診断の方法を説明し、問診・脳画像診断・認知機能検査による認知症の客観評価に加えて、主観情報による観察式認知機能検査の現状と関連する取り組みについて、先行研究に基づいてまとめている。

第3章では、多視点観察情報を活用した認知症評価システムについて述べている。ケア関係者が認知症の人の状況を多視点で理解することを支援するため、紙ベースで25年現場にて実践し900万人以上の認知症サポーター養成の実績を持つ行動観察方式AOSを、ICTで深化拡張して認知症支援システムを提案・実装し、AOS開発者の認知症ケア現場で実証評価まで実施し、有用性を検証している。

第4章では、多視点観察情報による共学環境の構築と評価について述べている。家族を含めた多職種のカラ関係者が連携して共に学び、認知症の人に関する理解を深めるため、複数人による観察情報を集約した多視点観察情報を比較提示する仕組みを設計し、認知症の人を観察するときの観察者の視点の収集・コンテンツ化・観察視点の学習支援が一貫して行える共学環境を構築し、複数のカラ現場で有用性を評価している。

第5章は結論であり、本論文の成果と今後の展望について述べている。

以上のように、本論文では、日本の認知症ケアを牽引する最先端の現場と協力し、関係者と信頼関係を築き、これまで現場での連携が困難であった多職種のカラ関係者の知識を共有し、診察・介護の実環境で活用できる認知症評価システムを開発するとともに、多種多様なカラ関係者がお互いの知識を持ち寄り将来に亘ってスキルアップできる共学環境の創成に関する有用な知見を与えている。以上のことから、本論文は博士(情報学)の学位論文としてふさわしいものと認められる。